

令和 6 年度

中標津町総合教育会議議事録

令和6年度中標津町総合教育会議

1 日 時 令和7年3月27日(木) 14時00分～15時20分

2 場 所 中標津町役場 301号会議室

3 出席者

町長	西村 穣
教育長	山田 康司
委員員	青山 幸子
委員員	細谷 俊輔
委員員	高橋 幸子
教育部長	山宮 克彦
教育指導監	横山 裕充
教育指導監	二本柳 千尋
指導室長	佐藤 雅澄
管理課長	表 健一
学校施設主幹	高橋 大樹
学校教育課長	下村 浩次
社会教育課長	七條 隆志
農業高校事務長	西東 仁
学校給食センター長	加藤 崇
総務係長	三浦 謙
書記	森井 彩花

4 欠席者

委員 義盛 幸規

5 傍聴者 なし

6 議事

- (1) 令和6年度標準学力調査について～中標津町における調査結果～
- (2) 令和6年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査について～中標津町における調査結果～
- (3) 中標津町における不登校児童生徒に関する報告について
- (4) 中学校における通級指導教室の開設について

1 開 会

○管理課長

本日は、お忙しいところお集まりいただき、誠にありがとうございます。

ただいまから、令和6年度中標津町総合教育会議を開催いたします。

開催にあたりまして、西村町長よりご挨拶申し上げます。

○町長

こんにちは大変お忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。

また、今年度も教育行政推進にお力添えをいただきまして、ありがとうございます。

さて、だいぶ春らしくなって、卒業式も無事終わりまして、次は入学式ということで、新一年生が入学されます。ずっと私は統計が好きで、子供の数がどんどん減っておりまして、よく職員にも話をしてますけれども、今年入った小学生だと7年前の子供、高校生は16年前に生まれた子供、ということは、今年生まれた子供は7年後の小学生、16年後の高校生。統計を見ますと、例えば、今年度生まれた子供が130人くらい、16年前に生まれた子供が270、80人でございまして、半分になるような数字で、そういう子が将来、町をどう支えていくのかな、と非常に大きな不安があります。選ばれる地域の一つに中標津町は果たしてなりうるかという部分もありますが、それを支える産業は非常に規模が大きいので、その産業規模は大切しないといけない。それに伴う周辺状況ですね。例えば、利便性がある、買い物がしやすいとか医療がしっかりしているとか、その中の一つに教育がしっかりしているかというのも入ると思うんです。

そういう面では我々がやはり小学校、中学校、義務教育、その後も含めて、

しっかりとした教育体制をとるというのは、今更言うまでもないと思うところありますので、是非しっかりした議論をしながら、将来、町を支える人材を作つていかなければいけないというのを背中にしっかりと背負って、議論していただければと思いますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

○管理課長

それでは、早速、議事に入らせていただきますが、中標津町総合教育会議設置要綱第4条第3項の規程により、これより町長が議長となり進めさせていただきます。

それでは、西村町長お願ひいたします。

◎令和6年度標準学力調査について～中標津町における調査結果～

○町長

改めましてよろしくお願ひします。早速ではありますが令和6年度の標準学力調査につきまして、説明をお願いいたします。

○指導室長

指導室佐藤です。よろしくお願ひいたします。私から大きく4つの内容でご説明いたします。

1点目は標準学力調査の結果についてです。資料をご覧ください。昨年12月に町内の全ての小・中学校及び義務教育学校で小学1年生から中学2年生を対象に実施した標準学力調査の結果です。結果につきましては、各校ばらつきがあり、各校それぞれの成果と課題があります。

各校では、校長のリーダーシップのもと、自校の分析や改善策の方向性が決まり、年度内での対応や新年度の計画を進めています。大切なのは各校の子どもたちの実態に合わせた改善だと思いますので、ここでは町全体としての傾向についてご説明いたします。

資料2ページをご覧ください。ここから資料4ページまでが各学年の評価、カテゴリー別の正答率の結果になります。資料4ページ下段のグラフをご覧ください。各学年における各評価の正答率と全国平均との比較になります。今年度は小学校2年生以外の学年で全国平均を下回る結果となりました。学力の定着という面から見ても小学校3年生以上で課題が見られます。また、学年が上がるごとに定着が不十分になる傾向が見られます。資料5ページからのグラフは同一学年の経年変化になります。こちらは学年によって、定着に差が見られる状況にありますが、特に小学校5年生の算数で対応できていない傾向が見ら

れます。

以上を受けまして、考察したのが資料7ページになります。考察結果は今年度も昨年度とあまり大きな変化はありませんでした。子供たちが苦手な領域、観点は町としての伸びしろの部分だと感じます。

また、今年度は無回答率についても考察しています。今後の取組の視点としては、令和6年9月に各校へ配布している中標津町学校改善支援プランの2つの重点と視点を上げています。

資料8ページをご覧ください。学力の向上を図るためにには、授業改善が必要だと考えています。わかりやすい授業、楽しい授業を進めるためには、子供が学びを自分事にする必要性を教員が意識し、自分事にするということの具体的な理解を学校として深めていくよう指導、助言を行っています。自分事にするという実践例として、中標津小学校 藤山教諭、丸山小学校 横川教諭、中標津中学校 神久保教諭の授業を紹介しています。学力に関しては以上でございます。

○町長

説明が終わりましたので、ご意見いただきたいと思いますが、いかがでしようか。

○細谷委員

今、指導室長からお話があったとおり、5年生の算数で著しく基準点が落ちてしまうのは、何か要因があるんでしょうか。

○指導室長

算数に限らずですけれど、1、2年生の内容は、3年生でぐんと上がるんです。その後に4年生の内容から5、6年生に向けてぐんと上がるんですけど、その上り幅が高いというところで、積み重ね教科であるということもありますので、そこでつまづいてしまうということが考えられるかなということと具体から抽象になっていくというところも大きいかなと思います。

1、2年生の具体物というところが、3年生になる時に割り算が出てきたりというような形になるんですけど、5年生になると割合が出てきたり、速さが出てきたり、人口密度だったり、そんな概念が出てくるとなかなか難しいと感じてしまう子が出るのかなというところです。学校も丁寧に授業はしているんですけど、結果としてはそのような形になっています。

○細谷委員

ちなみに町内の学校でのばらつきというのは5年生であるんでしょうか。

○指導室長

担任の先生の力量もあるので、年度によってここは必ず高いですということは一概には言えないです。数字だけで言えば、高いところと低いところで20ポイントくらい違ってきます。

○細谷委員

自分の知ってる限り、町内の学校においても宿題を持たせる学校、持たせない学校というのが存在するんで、いいとこどりを町内の学校で情報共有してもらえると、もうちょっとばらつきが減ってくるかなと思うんですが。

○指導室長

宿題に関して、以前もこの話題で細谷委員とお話をしたことがあるかと思うんですけども、宿題が出ているところが高いかというとそうでもなく、宿題がないところが低いのかというとその逆もあって、その時はその結果でしたけれども、今回はまた、宿題ある方が高かったりとかというところなので、本當にある程度の一定の水準を維持というところは難しい部分はありますけど、学校としては力を高めて行かないといけないですし、子供の力ももちろんですし、先生方の力量も併せて高めていく必要があると感じています。

○細谷委員

ありがとうございます。

○指導室長

今、授業の話が出ましたので、補足でお話しさせていただこうと思うんですけども、資料に載せている自分事というところを昨年度から教育委員会とか指導室では学校にお願いしています。資料に載せている3つの事例に関しては自分事として、子供たちが課題を持って学んでいけるというところを目指して、指導室もたくさん関わって、授業を作っていただきました。

最初の藤山教諭の指導案がそこに載っているんですが、読み聞かせを最初に町内のお話の木という読み聞かせをやっていらっしゃる方にお話ををしていただいて、そこから子供がもっと知りたいなと思った時に自分で調べていく課題を持って授業を進んでいる。最後にポップを仕上げて、授業をまとめとするというところで、常に子供が主役で授業が組まれていたところです。とても子供たちの動きがよかったです。先生は、今までの教師主導とは授業スタ

イルを変えているので、苦労しながらの取組ではあったんですけども、ここが大きな一歩になって、研修部長もされている先生でしたので、校内の波及というか、子供が主体的に学ぶという姿に学校が切り替わる大きな分岐点になつた授業でした。

2つ目は丸山小学校さんの横川先生の授業です。こちらのデータに隠れた真実に迫ろうという、この問題はどうやって解くでしようではなくて、データにある隠れた真実を探していくところでした。資料にありますけれども、クジラに会える確率は98パーセントというホエールウォッチングのデータを本当にそうなんだろうかというところからこの単元は入っていて、この授業の指導案は、靴のサイズが一番売れているサイズはどのサイズなんだというところを子供たちに、はてなを作らせてから授業に入っています。そうすると子供たちがそこをどうにかして追求したいと、自分たちで考えて取り組んでいく姿があった授業でした。丸山小学校さんは長いこと子供主体の授業ということで横山指導監がいらっしゃった時から進めていたところでしたので、学校内で積み重ねてきた実践として、見せていただきました。

最後です。中標津中学校の神久保先生という先生の美術の授業でした。早い段階から指導室が関わることができましたので、授業づくりの段階で先生主導のワークシートを作つてというような授業でしたので、いい機会だからちょっと刺さらせてもらおうというところで、ピクトグラムというところで村越愛策さんの東京オリンピックでのピクトグラムのお話からこれいいな、僕も作つてみたいな、私も作つてみたいなという思いから授業を組み立てていくというものでした。先生方手探りの中でも頑張っていただいて、自分事にしていただいているという実践でした。

○教育長

よろしいですか。先ほど宿題にまつわるお話をありがとうございましたが、私も実際現場で教員をしていたことがあります、宿題を出したってできない子はできない。宿題っていうのは決められたものをやるだけですから、子供が興味、関心をもってやるかというとそうではないです。全く出さない学校がすごい良い成績出す場合もあるし、非常に難しい問題なんですよね。横山指導監、その辺について何か補足してもらえれば。

○横山指導監

宿題っていうのはやれって言われてやるのはやりたくないですよ。皆さん、大人の方も誰もがわかっていて、宿題なんてやりたくもないのにやらされて、それを良かれと思ってやらせる。

そうではなくて、自分でやりたいと思ったことは自分で追及していくんです。だから、そうするために授業をどう改善すればいいかということなんです。授業から自分事にする授業していった延長線上に宿題があるんです。だから宿題を出さないのではなくて、宿題をやりたくなる授業をするということです。そういうことを取り組んでいったらいい。それをしないで宿題はやりなさいというのは、はっきり言って全くダメな指導だと僕は思っていて、我々はそう指導してはいけない。子供たちが思わず宿題をやりたくなるような授業をしようよという取組です。

出してないじゃなくて、やらなくていいとも言ってないです。好きにやってと言っています。そしたらやってくるんですよ、授業が面白かったら。先生こんな事調べたよって持ってきますよね。それが本当の学習です。つまり、生涯学習なんです。生涯学習していかなければならぬ子供をつくるには、こっち側

が与えて、宿題をやってこいよと言われたら、勉強したくない子が育つんです。

そうではなくて、勉強したくなる子を育てるにはどうしたらいいのかということ。だからあえて、宿題を出さないんじやないです、やらないんじやないです、やってきていいよ、を推奨してるんですよ。だけど、その前に授業でやりたくなるような授業をしようよ、と言っているんです。我々はそういう関わり方をしているんです。

先ほどの自分事の例をいくつかだしますけど、これを出したのはこういうきっかけがあつたら、子供たちは帰ってからでも調べちゃうんです。それなのに授業がつまらなかつたら、帰ってからやるわけがないじやないですか。一刻も早くやりたくない、離れたいですよね。でも帰ってからも調べてきました。先生、これどうですか、そういう子を育てなければいけないんです。それは小学校の時から積み上げていって、中学校になったらもっと手放しで、そして、もう自分たちでプロデュースするくらいの子を作れるんじゃないかなと思っています。

そこまでの計画で今一生懸命関わっていますけど、そう簡単に行きません。思っていますけどできません。でも今、取り組んでなんとかちょっとずつ変わってきたところです。今、例で示したところなんで、もっと全ての学校がそうなるように、計根別学園は来年度の計画も立ててくれています。次年度はもっと大替わりするんじゃないのかなと思っています。来年度の教育課程がすごい面白うことになっていますので期待していいと思います。大風呂敷を広げて大変んですけど、やろうと思います。

○教育長

更に加えると校長たちに多少学力下がってもいいから、授業改善しなさいと。

横山指導監が言ったようなことをやつたら、最初は下がると思うんです。やり方があわんないから。先生方自身が今まで、こういう授業をやってないから、先生方自体が変わっていくのに時間がかかる。だからもうちょっと先まで見通さないと結果が出ないと思うんです。

○町長

よろしいですか。

○細谷委員

ありがとうございます。

○町長

この件につきましてはよろしいでしょうか。

◎令和 6 年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査について～中標津町における調査結果～

○町長

それでは令和 6 年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査につきまして、説明をお願いいたします。

○指導室長

お願ひいたします。2 点目は、全国体力・運動能力・運動習慣等調査の結果についてです。資料 14 ページをご覧ください。

こちらは体格になります。昨年度と比較するとおおむね、同様の傾向が見られますが、今年度は 5 年生女子の肥満傾向が高くなっています。

資料 15 ページは、実技の結果になります。項目ごとで見ると中学 2 年生男子以外はほとんどの項目で昨年度より、高くなっています。

資料 16 ページは各実技、合計点での T 得点を令和 3 年度からの記録と比較したグラフです。今年は合計点で中学 2 年生男子以外が全国平均を超える結果となりました。

また、これまで課題であった中学 2 年生女子で成果が現れており、令和 3 年度以降では、初めて合計点が全国平均を超えるました。各学校の取組の成果がしっかりと現れている結果と言えます。

17 ページからをご覧ください。体力得点総合評価の割合では、5 年生女子、中学 2 年生女子で総合評価の高い A 層の割合が全国平均よりも高い傾向にあります。

19 ページをご覧ください。こちらは児童生徒質問紙を主な質問項目のみ掲載

しております。中学2年生女子の結果では、ここに掲載されている全ての項目において、前年度を上回る結果となりました。

20ページから23ページはクロス集計になります。分母となる人数が少ないため、いびつな結果になっているグラフもありますが、体育の授業を楽しいと感じられること、睡眠時間をしっかりと確保することが体力向上と相関関係があると受け取れます。

以上のことを受けまして、考察したのが24ページになります。その結果、今後の中標津町としての取り組みの視点を2点あげています。25ページ以降をご覧ください。

一つ目は目標に向かって学ぶ、楽しい体育の授業です。中標津町学校改善支援プランや昨年度の体力テストの考察などと同様に一人一人が学習の目標を持ち、楽しいと感じられる個別最適な体育の授業づくりをさらに進めていくよう指導助言を行っています。

二つ目は中標津東小学校の実践に学ぶです。24ページの考察にも記載しておりますが、ここ数年間における校内の体力テストの結果を学校ごとに比較しますと中標津東小学校の結果が継続的に高い傾向があります。

さらに今年度は広陵中学校の結果も高い傾向にあり、旭ヶ丘学園としての成果が現れていると言えます。

そこで中標津東小学校の荒井主幹教諭を中心になって進め、平成30年にスポーツ庁で取り上げていただいた実践を中標津町として、取り組んでいくことで、更に体力の向上が図れると考えています。

以上2つの視点を意識して、各校の次年度の取組の改善を図っていただけますよう指導、助言を行っております。体力に関する以上でございます。

○町長

説明が終わりましたのでご意見をいただきたいと思いますが、いかがでしようか。

体育の向上というのは、例えばスポーツの成果とかにつながっていますか。

○二本柳指導監

部活の成績にそこまでつながってるかどうかについては、わかりません。

○細谷委員

部活に入る子供がどんどん減っている感じがありますよね。特にスポーツをやる子が団体競技から離れていく。データを見させてもらって思ったのが、今、子供と一緒に活動する機会があるんですけど、僕が子供だった時から見たら今の子供の方が身体能力でいくとやっぱり、落ちているかなという感じはするんですよね。

ただ、それにも関わらず全国よりも逆に上ということは、全国的に子供たちの運動能力というのが落ちてきているという現状があると思うんです。例えばそこを平均より上だからいいと捉えるのか、やっぱりもっともっと伸ばしていくという考え方があってもいいのかなという感じはします。

○町長

例えばこの10年前、20年前から見た調査の比較だとかあるんですか。

○指導室長

すみません。データがさかのぼれなかったので、さかのぼれるところでしか

比較ができないものですから、20年前はわからないです。

○教育長

言えるのは私が教育長になってから、今年が一番高いです。それは間違いない、もう散々な思いをしてきた。町内一番人数の多いここから近い中学校は根室管内でも最低、もっと言えば全国最底辺をうろついてましたから、今は全然違いますね。すごく伸びてます。

ここは是非、皆さんによくやったと褒めていただきたいと思います。体力ない子は勉強もできませんから、これだけ頑張れるんだったら、次は学力もいけるよね。最初つまづいてもいいけど、頑張りましょうという話をしていますのでおそらく根室管内で一番本町が体力ついてます。

○指導室長

教育長の言うとおり今年いい成績で、中2女子が今までどうやっても上がらないなどと思っていたのが、ここに来て上がってきたので、この学年だけでとどまらず、つながっていってくれればなと思っております。

○町長

学力の改善は授業でたくさんありますけど、体力改善というのは上がったり、下がったりするというのは何か理由があるんですか。

○教育長

私見でよろしいですか。二つ大きくあるのは、子供たちがやる気を持って取り組んでいるということです。取り組ませるために教員も頑張っていることで

す。いい加減にやつたらがつたり下がりますから。

私が来た時なんか体力テストをやってるのなんかみたら、ふざけるなというような真剣味の足りないものでした。こういう成績になっているときって、子供たちも先生たちも必死でやってる。自分事として取り組んでる、そこが一番大事なところじゃないでしょうか。

○町長

普段から運動しているということですね。

○横山指導監

町長が気になさっていたスポーツなんかと直結するかどうかは別問題なんですよね。それを特化してやっていることについては、また球技なんかとは方向性がちょっと違って、体力をつけるつけないについては、また別の問題があつて、意欲的な問題もすごく大きく、学校の今の状況も含めて、これから伸びてきてると考えます。

すごくわかりやすいのは歩いて学校に来る子、家庭が送って来る子、歴然と体力が違います。これははっきり言って学習に影響するんです。一方、いつも歩いて来ている子が体力があるから、じゃあ野球ができるかというのは、それはまた別問題という話になるということです。

それはやってる子にはかなわない、少年団に入っている子はできるということなんで、このテストの結果との違いがそこにあります。

○細谷委員

小学校5年生が本町において、体育は楽しいですかという質問で非常に全国、

全道と比べても点数が下がってしまう要因はなにかあるんでしょうか。19ページのです。

○指導室長

体育の授業は楽しいですかが低い。ちょっと今年は下がっています。去年と比較しても下がっているんですよね。楽しいですかが上がったのは中2の女子だけだったんですよね。

今年に関してはですけど、同じ子供たちで比較しているわけではないので、一概には言えないんですけど、ちょっとそんな傾向がみられます。

○細谷委員

個人的な感じでいくと体育って一番楽しいんじゃないのかなと普通の国語、算数とかからみたら、楽しい子が多いんじゃないのかなと思うんですけど、体育でこれだけ低いと他の授業でもっと下がってしまうのかなという感覚に陥ってしまってちょっとそこが心配でした。

○指導室長

先ほど横山指導監や教育長が言われたとおり、自分事として楽しんでという、楽しく学んで、それこそ帰ってからも宿題と一緒に運動したいなって思って子供たち同士で楽しみたいな運動したいなって思える子供たちを育していくのが良いのかなと感じております。

○教育長

例えば、ドッヂボールの授業を例にとると投げるのも受けるのも逃げるのも

得意な子って少ないですよね。ところが投げるのが得意だから内野の人に助けることに集中しなさいって、受けるのが得意ならなんとか強い球でも受けてやり返しなさい、どっちもできない子はとにかく必死で逃げる。球に当たらないようにしなさい。それができれば勝てるんだよと教えて、達成すれば子供はすごく喜ぶわけです。それも自己肯定感につながるわけでねそういう授業をやつしていくと子供は楽しいと思う。

学校が投げるのも受けるのも全部ちゃんとやらなきゃだめみたいな指導をすると子供はドッヂボールつまらなくなる。役割分担を教えながら、いかにそれぞれのスポーツにやる気だとか、やりがいを持たせながらやるか。先生方でもっともっと考えるようになれば。ただ基本的に体を動かすのが嫌いな子もいますから、98.1 いったのはすごいなと私は思っています。9割が体育が好きだということは、すごいことだと思うんです。

○町長

19 ページの質問で、例えば朝ごはんを毎日食べますかというのが低い。こういうのでなにか影響ができるんでしょうかね。

○指導室長

だんだん下がってきているのは少し感じてはいます。どんな影響がというところは、この後の生活リズムとか不登校とか絡んでくるとは思うんですけども。

○町長

例えば寝る時間だとかゲームやパソコンをやってる時間が長いと、そういう

ような相対的な影響が出そうな気がするんですけど、そういったのは特に何かありますか。

○指導室長

相関関係まではつかんでいないので、想像の域でしかないですけど、やっぱり食べてない子は体力とクロスで見れば低いですし、寝てる時間が資料にもありますけども、睡眠時間が少なければどんどん体力が下がる傾向がありますし、学力との相関で見るとメディアタイムが多ければ多いほど正答率も下がるというところが見えるかなと意識しています。

○町長

それは指導の動きっていうのはあまりないですか。

○指導室長

学校にはそれぞれの項目として、改善を求めるようには働きかけていますし、学校も機会があるごとに保護者に訴えてはいるんですけども、結局そこを言っても改善されるかどうかというところは、そのご家庭によってしまう部分が多いかなと感じています。それこそ、そこが変わらないので、上げられない要因であるのかなと思います。

○横山指導監

この部分と言うのは光・暗闇・外遊びっていうことを実践することでご飯食べるのと寝るのも解消される。どういうことか、早寝・早起き・朝ごはんが流行りました。これはキャッチフレーズなんですよね。それをするために何を実

行しなければならないのかというのは出てなくて、やらなければならぬのは、光・暗闇・外遊び、というのは日中、光を浴びて外で体を動かしましょう、そうするとホルモンが出て、夜寝れるようになります。夜明るい光を浴びていたら、寝れなくなります。これもホルモンの影響ですね。だから日中光を浴びて、外遊びをしましょう。

つまり、学校で体を使ってよく動かし、外に出ましょうということ。そして家庭に帰ったら、メディアにいっぱい触れることなく光を浴びないようにしていれば寝るようになる。そうすると朝起きれるでしょ。それで早起きになる。そうしたらお腹が空いてますから、そしたら食べれるようになる。何をしたらそうなるのか、我々の指導はそこをやっていきましょうと。そうしない限り、キャッチフレーズを言ったところで良くなるはずがない。

○町長

それでは、この件についてはよろしいですか。

◎中標津町における不登校児童生徒に関する報告について

○町長

次に中標津町における不登校児童生徒に関する報告につきまして報告をお願いします。

○指導室長

3点目は不登校児童生徒についてです。現在全国で不登校の児童、生徒が約34万人いると言われています。中標津町におきましても、不登校は大きな教育課題の1つです。そこで中標津町における不登校児童生徒の現状についてお伝えいたします。

資料29ページをご覧ください。文部科学省では毎年いじめや不登校児童生徒の現状を把握するために児童生徒の問題行動と不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査を行っております。その調査では1年間に30日以上の欠席を不登校としております。欠席理由として、病気、経済的理由などは含まれず、何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因背景により児童生徒が登校しない、あるいはしたくともできない状況にあるものと提示されております。不登校の具体例については30ページに掲載しています。

31ページをご覧ください。それでは令和5年度の記録を元に比較していきます。まず、全国の結果についてです。児童生徒1,000人当たりの不登校の人数は資料上段にありますように37.2人となっています。小学校と中学校で比較すると中学校が高い傾向にあります。

次に北海道の結果についてです。資料下段をご覧ください。都道府県別で比較すると北海道は全国でも不登校数が多いことがわかります。資料には掲載し

ていませんが、児童生徒 1,000 人当たりで比較すると北海道では 41.8 人で全国よりも高い人数になります。

次に根室管内の結果についてです。こちらも資料がありませんが、1,000 人辺り 49.3 人となります。

最後に中標津町の結果についてです。資料 32 ページをご覧ください。資料には数字としては掲載していませんが、町内の児童生徒 1,000 人当たりでは 40.4 人となり、全道の平均よりは若干少ない結果となっていますが、全国よりは高い結果となりました。また、小学校、中学校で比較するとやはり中学校が高い傾向にあります。

次に不登校児童生徒の現状についてです。33 ページをご覧ください。資料にありますとおり、今年度の調査は現在行っているため、令和 6 年度の結果はまだ把握できていません。

参考として、毎月学校教育課が行っている不登校解消対策個票から人数を掲載しています。それでは指導室で押さえている本町の不登校児童生徒が登校できない主な理由についてです。資料中段をご覧ください。

四角囲みの中の内容が一つの理由になるケースもあれば複合的になっている児童生徒も多く見受けられます。また、体調不良、登校渋り、不登校傾向、友達とのトラブルといった言葉で片付けられることも多くありますが、突き詰めるとこれらのいずれかに起因する場合が多く見受けられます。

学校現場では増加傾向の不登校対応に苦慮しながらも、各校とも電話連絡や家庭訪問を継続的に取り組んでいただいております。また、タブレット端末を活用した授業配信やチャットでのやり取りなど子供の発達段階に合わせた取組をしています。

また、不登校になる前に子供たちをケアするように指導、助言を行っていま

す。町内の令和5年度の不登校生徒45名の内21名が中学3年生でした。

卒業後の進路は中標津高校が4名、中標津農業高校が5名、通信制高校が10名、家事手伝いが1名、他県への転出が1名でした。以上のことより教育委員会教育指導室としては次のような取組を続けています。

資料下段からをご覧ください。今年度は不登校対策スタンダードの改定とICTに関するガイドラインの策定を行っています。

また、調査研究ではありますがメタバースを活用することができました。さら、に相談センターと二本柳教育指導監の連携で毎月不登校児童生徒への対応について学校に指導、助言を行っております。

また、その際、子育て支援課との連携や共有が必要な場合はケース会議を開くなど迅速な対応を進めています。不登校に関しては以上でございます。

○町長

それでは説明が終わりましたので、ご意見を頂戴いたします。

昔から見たら、増えてる要因ってなんですか。

○指導室長

私の視点になるかもわかりませんが、コロナが大きいと捉えています。その時に行かない選択をし、不登校へのハードルが大きく下がったことで、あの子が休んでるだったら私も行かないというものが増えたのが一つかなというところです。

○町長

32ページの資料の中で平成30年の中学で全体的に上向きじゃないですか。

数字が今後も増えるのかなという感じがするんですね。増えている要素って何なんだろう。コロナも一つの要素にあると思うんですけど、長い目で見た時に増えてるのは何なんだろう。

○横山指導監

一番は学校に行かなくていいよという社会の風潮でしょう。家庭で昔は学校に行けよと尻を叩きました。今は叩かないです。行かないなら行かなくていいよ。子供中心で家庭も考えるので、子供が行きたくない、じゃあ行かなくていい。今後どんどん増えていきます。

○町長

親がそう言うの。

○横山指導監

そうです。

○高橋委員

お姉ちゃんが行ってないから、私も行かなくていいというきょうだいで不登校の家庭ってありますよね。

○横山指導監

なりやすいです。なんかと言うとモデルがそこにありますので、行かなくていいんだって姿が見えた時に行かなくていい選択肢がはっきり見えますので、なりやすいです。必ずなるというわけではないけど、なりやすい傾向が間

違いなくあります。

○二本柳指導監

それが 33 ページ四角の中にはありますけども、起立性調節障害という言葉を最近聞くようになりました。起きられない子供が増えてきてるんですけども、原因を起立性調節障害だねと言われることによって、お墨付きをもらったようなそういう子供が増えてきてるなと思います。医者の方からも起立性調節障害で学校に行きなさいという指導は、まずないです。むしろ医者は無理しないでということになっているんで、今言われたような学校を休むことへのハードルが段々と低くなってくる。多様性の時代ですから、いろんなことが認められる時代というのもあるのかなと思っております。

○横山指導監

後は、メディアの悪影響がいくつかありますから、先ほど言った眠れないような状況を作ってしまうメディアの悪影響ともう一つはメディアに染まつてほかのお友達とのトラブルなんかを悪い影響といつかメディアに関わっていることで、これらが今後もなくなりはしないだろうという原因の一つになります。

○教育長

後はやっぱり、親御さんが不登校気味だったり、社会性があまり高くない家のお子さんはかなりそうなる確率は高いです。

それと新聞を見てもテレビを見ても学校行かなくてもいいというような報道や記事があまりにもたくさんあるんで、そういうようなのがものすごい多いで

す。

○町長

子供の数が減っているのに数字が上がっているというのはなんでなんですか。

○横山指導監

むしろ親が自分の子供ばかりすごく過保護っていうんですかね。囲ってしまって。

○町長

不登校の子供って、高校にいろんな理由があって行くんでしょうけど、学業成績ってやってないと高くないですよね。

○指導室長

高くないです。幅はあります。どこで不登校になったのかということと、いろんな不登校のお子さんがいて、本当に来れないお子さん、言葉がよくないのかもわからないんですけども、本来来れるはずなのに不登校をやっているお子さん、行きたいんだけど集団に入れないので勉強するんだ、という子と朝からずっとユーチューブを夜中まで見て、朝起きられないから昼間寝てますみたい子では、勉強に対する向かい方が全然違うので、勉強しなくても通信でいいわと言ふんだけれども、通信制の教育もある程度の学力が必要なのでというところで苦しさを感じている子もあります。

○細谷委員

すみません。僕がやっぱり今子供がいる中で、そういう話を聞いたり、現実的になってしまふと思うんですけど、現状として話を聞く中でやっぱり親がどうしても甘いのかなと思わされるのが非常に大きいです。本当にその子は普通に学校行けますよね、というような感覚でもあったり、うちも可哀そうだから、任せてるんだ、学校に行ってないんだという事例。学校に行かなくてもいい感覚がどうしても保護者にあると、どうしても子供もそういうような感じになってしまって、そこからまたその友達が休んでるから学校ってそんな無理していく必要ないのかなって、というのが伝染してしまって、N中、広陵で特に強いのかなと。

僕が気にかけていただきたいのは起立性調節障害も本当に聞くんですよ。その話を聞いていったりすると最初の要因がいじめであることが非常に多いんですよ。学校で嫌な思いをした。友達から嫌な思いをされた。そこから行きたくなくなってしまって、最終結果を聞いて起立性調節障害学校ってそこを切り取ってしまうんですけど、そこに行きつくまでの内容とか小さいじめというのは、いまだに各学校で子供たちの社会の中で起きているので、そこをもうちょっと包み隠さず真摯に学校が心配をしていかなきやいけないのかなというのが感じております。

僕も学校に行った時にいじめはありますかと聞いたときに、うちの学校はあまりそういうのはないですっておっしゃるんですけど、やっぱり子供たちの中では大体いじめにあってるよとかいう話も聞きますので。

○教育長

ちょっと細谷さん、いじめはないと言い切るんですか先生方。

○細谷委員

学園の先生は言わないです。ただ、ほかの学校に行った時とかにいじめとかありますかと聞くと。

○教育長

それはありえないですから、ないわけないんですから。

○細谷委員

ですよね。

○教育長

そういうのはないわけないんですから、そうやって言う人を疑ったほうがいい。そういうことがあるから、何とかしようとみんなで一生懸命知恵を出し合ってるんですけど、そういうこと言ったりしたら、名前教えてください。ちゃんと指導しないと誤解を招く。

○細谷委員

あるのが、PTAに学校がそう答えがちなんですよ。ただ、僕が教育委員として、お話しするところという問題が起きるんですけど、PTAの総会とかで話が出た時に今はそういうのはなくなってきてます、みたいなことを言ってしまうので、そこでまた保護者から反感をもって学校に対して信頼をしなくなってしまって、不登校につながるというのもあると思うんですよね。そんな感じだったら学校行かなくていいかなみたいな、うちの子守ってくれないんだ、みたいなのはやっぱり実際起きてたりしますね。

○教育長

それは本当にすぐ教えてください。指導します。大人の世界だっていじめがあって、子供の世界でいじめがあって、これはどんなに頑張ったってなくならないですから、それはないです。

以前に比べたら、改善されてますとか、この件については問題解決しましたとかは別ですよ。いじめはありませんっていうのはあり得ない。必ず教えてください。

○町長

不登校の子供が中学を卒業して高校に行くじゃないですか、リセットボタン押された何かあるんだろうなという感じはします。

ほかにどうでしょうか、よろしいですか。

○高橋委員

いじめは私たちから見れば対応しているのに早く言ったもん勝ちみたいな。お前の方が悪いだろう、そっちがこう言ったからみたいな会話を毎回されると思うんですね。それをいじめととるか。保護者からうちの子を守りに入っちゃうと学校に任せられない、というような形で学校が居場所じゃないような状態を作ってるというようなご家庭がすごく多いんじゃないかな。そうなってくると不登校は学校だけじゃ対応しきれないので、それこそ家庭と教員、地域とかみんなで考えていいかないと、なかなか解決はしない。だからどうすればいいのかは、これから考えます。

○二本柳指導監

高橋委員が言うようにそれぞれの家庭で親御さんも悩んでる家庭がたくさんあって、そこは家庭の意見を聞きながら、先生方と様子をしっかり把握しながら、たくさん増えてきてますけど、それぞれの家庭の子供の事情がいろいろ違っているんです。それに対応していく様に各学校の先生方と一緒に連携して個別に対応して、少しでも減らせるようにしていきたいと思います。

○町長

よろしいですか。それではこの件について終わります。

◎中学校における通級指導教室の開設について

○町長

次に中学校における通級指導教室の開設について説明をお願いします。

○指導室長

4点目は中学校における通級指導教室の開設についてです。よろしくお願ひします。

資料35ページをご覧ください。近年、全国的に児童生徒が減少する中、特別支援教育を受ける児童生徒は増加傾向にあり、文部科学省は特別支援教育の方針として、通級指導教室の拡充を進めています。

本町における特別支援学級の在籍率は、文部科学省が令和5年に発表している特別支援学級在籍率全国平均の4.0%を大きく上回る状況にあります。

特別支援学級と通級指導教室の違いについては資料36ページをご覧ください。通級指導教室は普通学級に在籍し、取り出しや放課後学習によって支援するものです。

中標津町の特別支援教育の現状については資料下段からをご覧ください。中標津町において、特別支援教育は大きな教育課題の一つです。根室管内の中心地である本町には人が集まりやすい傾向にあり、子育てに关心のない家庭やトラブルを抱えている家庭など、家庭環境的に課題のある児童生徒も少なくありません。そのため、全国的、全道的に見ても中標津町は特別支援学級への在籍率が高い傾向があります。

また、教員側の意識にも課題があり、落ち着きがない、勉強が苦手イコール特別支援学級という風潮もあり、インクルーシブ教育の視点が弱い傾向も否定

できません。そのため、町内の特別支援学級の在籍数は年々増加していました。

そこで、中標津町教育支援委員会による適正な在籍判断、中学校における通級指導教室の開設、それに伴う特別支援教育内容の質の向上を進めてきました。中標津町における特別支援学級在籍人数及び在籍率は資料 37、38 ページをご覧ください。令和 7 年度、小学校で在籍率が大きく改善しました。要因は様々ですが、通級指導教室の理解が進んだことが大きな要因と考えられます。逆に、中学校での在籍率は増加しています。

これは、これまでと同様の支援を望む保護者の声が大きかったことと、中学校における通級指導教室が開設されますが生徒や保護者の認知が充分でなかつたことが考えられます。

そこで教育委員会及び指導室として次のような取組を進めています。資料 39、40 ページをご覧ください。まずは巡回指導リーダー教員の活用です。中標津町は令和 6 年度効果的かつ効率的な巡回指導の実施に向けたモデル構築授業を活用し、モデル授業として中標津中学校に通級指導教室を開設することとし、中標津学園として連携を進めています。

また、旭ヶ丘学園でも巡回リーダー教員が研修会を行っており、通級指導教室への理解が深まっています。

次に特別支援教育コーディネーターと管理職を対象にした研修会の実施です。校内における特別支援教育の中心である特別支援コーディネーターと支援体制を構築できる管理職を対象に研修を行い、校内の波及効果を狙った研修会を実施しています。

また、研修会を通して町内の特別支援教育コーディネーター同士が自主的に集まる機会を作るなどの広がりを見せていました。

さらに巡回指導リーダー教員のつながりを生かし、北海道教育大学札幌校特

別支援教育山下公司准教授、札幌市立信濃中学校学びの教室担当田近健太教諭による特別支援教育充実研修を令和7年4月22日火曜日に中標津小学校を会場に実施する予定です。

また、福祉と教育の連携として、令和5年よりはぐくみ@カフェを開催しており、学校や関係機関から好評の声をたくさんいただいております。

今、中標津町の特別支援教育は大きな転換点に来ております。今後も子供たちの健やかな成長のため、教育委員会、福祉課、各関係機関が連携して特別支援教育の適正化を進めていきます。特別支援に関しては以上でございます。

○町長

ありがとうございました。説明が終わりましたので、意見はどうでしょうか。
小学校の事例数が減ったということはなぜ減ったのか。

○指導室長

在籍を通級指導教室でという部分を多くしたのと言語在籍学級のお子さんを本来言語はそういうことではないですよね、というところで、普通学級に戻ったり、通級にいったりと在籍変更したことが大きいかなと。これから入ってくるお子さんもこの子だったら大丈夫じゃないですかって、心配だったら通級に行かれたらどうですかということで、判断した部分が多かったかなと思います。

○町長

支援児童数は実質的には減っているんですか。

○指導室長

はい、減りました。

○町長

中学校が増えてるというのは。

○指導室長

多い人数がそのままなので。中学校は外れなかったというか、今までこう來たので中学校でも、と言うのがあったかなと捉えています。

○町長

これから減るということ。

○指導室長

小学校から順にいくと適正な数字に近づいていくんではないかと判断しています。

○町長

数字で見れば高いですね。全体的に何か理由はありますか。

○指導室長

先ほどからつながっているところなのかもしれないですけれども、生活リズムだったり、睡眠の部分だったりというところが家庭環境に起因する部分は大きいのかなと捉えています。

認識の仕方で先ほど言ったように勉強できないんだったら、特別支援教育へ

という特別支援教育の理解が広がっていると言えばいいんですけども、そういうじやなくて勉強ができないんだったらそっちに行きなさい、というような数の増え方というのが大きいのかなと。先ほどの睡眠の件なんですけども小さいころに睡眠時間がある程度確保しないと脳の発達上、発達障害もどきが出来上がるで行動としてはASDだったり、ADHDと同じ行動を示すお子さん、後は愛着障害、小さい時に子供とたくさん関わってあげることでできる愛着、アタッチメントの部分が欠落しちゃったまま、大きくなるとこれもまたADHDやASDと同じような行動、行為が見られる。そうすると先生方は、そこまで判断できないので、特別支援がいいんじゃないですか、というところが増えているんではないのかなと3年間で感じることは多くありました。

○細谷委員

自分の子どもの先輩に当たる子たちが入ってたから、うちの子も入れちゃおうかなみたいな認識の親たちもいるのかなと。後、一回外しちゃうとまた戻れなくなっちゃうから、なんとなく改善されててもそのまま継続してしまうみたいな話も聞こえたりもします。

○教育長

中標津町というのは根室管内でも一番特別支援に対する手立てが厚かったです。先進的にやってたんです。当然そうすると就学を判定するときに網の目が細かいので残る子たちが多いですよ。それもあって、どんどん増えてきたのが続いていたんですけど、やっぱりこれじゃ良くないだろうということで網の目をあまり細かくしないようにして、これからは少し減っていくかなと思うんですけど、その辺り横山指導監から何かありますか。

○横山指導監

なかなかこの考え方は難しいかなと思うんです。大きい話をさせていただいてもいいですか。僕が就職した頃、30年前の時には片親か共働きの子供をみたら一発で分かりました。それはクラスに4、5人しかいませんでした。今はクラスほぼ全員です。それが当たり前になっちゃってるんです。その当たり前になっている状況というのが、実は当たり前じゃないのに、皆がそれだと思ってる。皆僕から見るとこの子は気になる子です。全員気になる子です。

じゃあ、その子たちはどういう生育過程をたどってきたか、結局一番大事な時期にしっかり子供と関わってない。そして、うちの子は落ち着きがないと言うわけですよ。それはそういうふうに育てちゃったでしょという話で、それがそのまま来るんです。そうすると今度はこちら側の見立てとして、落ち着きがないという部分があるのと幼児過程の中で引きずられて、落ち着きがない状況が生まれるんですよ。そしたら、一気にその人数が増えて見えるんです。ところがよく見たらその子だけだったりするわけですよ。その辺を見極められないで、皆、学校に上がってくる時にこの子もあの子もそうだなとなって、さっきの網の目の話ですけど、みんな特別支援だという話になっちゃうんです。できるようになったとき大丈夫じゃないかってしていったら、もうちょっと抑えられるし、今年度の状況はだいぶ抑えられています。ということで正しくいきましょうという話になってくる。

親は親で昔は特支学級になんでもうちの子を入れるんだって話で入れたがらなかつたところが、ちゃんとした教育を受けたいから入れさせてくださいって一生懸命お願いしたのは学校側なんです。

それが途中から特別支援教育の理解が進んでいって、入れてくれるとちゃん

と見てくれるとわかって増え始めたんだけど、今度は我も我もになってくる。そういうんだったら、いいことがありそうだとどんどん入れるようになった。一度付けちゃうと、なんか家庭教師を一人付けてくれたという感覚でずっと見てくれるからいいよ。あなたもそうしたら、になっちゃうんです。ということですずっと継続しちゃうって話になっちゃいます。今度はなかなか断ち切れない状況ということが生まれてきているのが、入っちゃっていたのを断ち切らなければいけない状況をやっと動いてきたところです。正しく特別支援教育を見直しましょうという話です。勉強ができないからってそれはもうサポートじゃないよ。この子はこういう子だ、ということがあるんだから、そこをなんとか改善してあげることが特別支援教育なんですよ。

それにはそれぞれの障害者に応じた適正な対応の仕方をしなければならないんです。だから本当は大変なんだけど、ただ勉強ができない子、あるいは落ち着きがない子というだけの見方で見ちゃってきたために、対応が一向に良くならないまま、本当は外していく特別支援の子ももう大人になっているから、自立しなければいけないわけですから、ずっと囲ってても仕方ないです。自分で独り立ちさせるようにしていく。だから、外していく特別支援教育の考え方なのにずっと行っちゃう。そういうことをしてはいけない。

○高橋委員

私の周り、孫世代にあたる子たちが今小学生なんですけど、特別支援に入れたいお母さんが何名かいいて、私たちから見るとただの子供らしい子供でしょつと思つても是非入れたいお母さまが何人かいらっしゃいます。

○横山指導監

勘違いしていると思います。

○高橋委員

私たちが単に勘違いで違うんじゃないと言っても今周りを見ると特別支援なんじゃないかなうちの子って考えるお母さまがいるので、きちんとした判断を先生方がしていただければなと思います。よろしくお願ひします。

○町長

後はどうでしょう。

○細谷委員

横山指導監からお話があったような現状が実際だと思います。本当に中標津の支援の状況がすごく良いんですよ。なので、先ほどのお話じゃないんですけど、家庭教師をつけて、個別に見ていくみたいな感覚がどうしても広まってしまっているので、逆にもう大丈夫かなという時にまだ不安だからそのまま続けさせようと、いつまでも続いているので、実際学校に行くとなんでサポートしなきゃいけないのかなという子って実際多いんです。

○町長

この件はよろしいですか。

議題は全て終わったということで、会議を終了したいと思います。今後も皆様のご意見を頂戴しながら、進めていきたいと思いますので、よろしくお願ひ申し上げます。

これをもちまして、令和6年度中標津町総合教育会議を終了いたします。ど

うありがとうございました。